

第7期愛知政治大学院後半期を迎えるにあたり 辻内 裕也

今年4月に入学させて頂いた政治大学院も気が付けば後半期にさしかかった。入学当初は周りの皆さんのレベルの高さに圧倒され自分に本当に最後まで出来るだろうかと不安一杯であったが良き仲間、素晴らしい講師の皆様、そして事務局の方々のサポートのお蔭と感謝しております。

私が政治の世界と関わり始めて3年。この間、私がずっと感じてきたのが有権者の政治に対する無関心さや不信であった。この政治に対する無関心さや不信をどの様にしたら打破していけるのか答えを見つけ出す一つのきっかけとなればと政治大学院の門を叩いた。未だ「これだ!」という答えには行き着いていないが徐々にではあるがうっすら答えが見え始めているような気がする。

世に言う「政治不信」というものは政治家や官僚の不祥事などが重なることによって政治に対する不信が蓄積されていった結果と言われることが多い。確かにそれも正解と言えよう。ただ、最近、つとに思うのは最近の日本における政治不信の原因は、「政治の不祥事」からくる不信よりも社会に蔓延する「諦め」が根本にあるような気がする。つまりここ数年で顕著になってきた社会のあらゆる場面で見られる「格差」の中で自分自身が今、置かれている状態を考えた時に将来に希望を見出すことが出来ない。もっと言えば、自分の努力だけではどうすることも出来ない程の格差が存在している現実があるということだ。この言わば、構造改革の波から取り残されてしまった人達が、本来ならば声を上げて自分達の境遇を改善するために政治の場が存在するはずなのに、もはやそうすることも出来ない精神状態に追い込まれてしまっているような気がする。確かに小泉改革により日本がこれからのグローバル社会を生き抜いていける力を養ったところもある。ただ、その流れに上手く乗れない人々、取り残されてしまった人達がたくさん存在することにも十分に配慮しなくてはならない。今の日本が抱えるあらゆる問題がこの社会に蔓延する「諦め」に配慮していくことでそれを解決していく一つのきっかけになる気がする。そのためには、やはり政治が国民の目線に立ち返り、国民一人一人に語り掛けて、一つ一つの問題に誠実に望んでいく姿勢が求められていると思う。

国民一人一人の「諦め」はやがて社会の活力を失って国の競争力を損なうことにも繋がる。そうしたことにならないためにも、国民がきちんと将来に希望を持つことが出来るような政策を示していくことが今の政治に求められていると思う。自分もその一翼を担えるよう残された半年間、この政治大学院で学んでいきたい。